

《庭で》
絵画制作における写真の活用
《In garden》
Inflection of the photograph in the picture production

1721M02
中島 知宏
Tomohiro NAKASHIMA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻 平成30年度修了生
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《庭で》 キャンバス、油絵具 3636 × 2273 (mm)

現在、絵画を制作する際に写真を構図やモチーフの資料として使う人は珍しくない。自身もその1人である。自身が高校生の時に初めて油絵を始めたが、その際もスケッチと写真を撮ってくるように言われたのを覚えている。その頃から写真を使うことに何も疑問を持たずに絵画制作を行ってきた。これは自身だけに限ったことではなく同世代のアーティスト（制作者）は年上の世代に比べて写真に対する抵抗が少ないように感じる。1981年～1996年に生まれた人は「ミレニアル世代」（アメリカのピュー・リサーチ・センターによって定められた言葉）と呼ばれ様々な分野で注目を集めており自身もその世代に含まれる。この世代の特徴の1つに「デジタル・ネイティブ」という言葉がある。これはミレニアル世代がインターネットや携帯電話、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）をはじめとする新たなネットワーク技術を当たり前のものとして受け入れてきた唯一の世代という意味である。自身も物心ついた時から日常的にテレビ、パソコン、携帯電話の画面を見て育った。2011年、写真を共有するSNSであるFlickrは1日に約700万枚の写真をアップロードした。だがその2年後の2013年に同じく写真を共有するSNS、Instagramでは1日に約5500万枚の写真が共有されている。ここ数年間で見ても写真というメディアはSNSやスマートフォンによって爆発的に共有され日常に浸透している。このように日常的に写真を消費するミレニアル世代は絵画制作という場においても写真技術を当たり前のものとして受け入れていると考えられる。自身も写真技術を当たり前のものとして受け入れてきたが、描く作品は扱う写真やもたらされた環境によって大きく影響されたと考える。本稿では稿者が絵画制作をするにあたって影響を受けた“写真”を様々な角度から考察し直し、現在の感覚に合わせて写真を活用し絵画制作を更新する方法を模索していく。

第1章では2000年代からのデジタル写真の進歩と日常化という点から現在の自身の環境を作っている写真を様々な角度から考察していき自身の制作にとってどのような影響があったかを確認する。第2章ではデジタル写真の影響によって生まれた感覚を解決するために現代作家のゲルハルト・リヒターを研究し現在の感覚にあった写真の活用方法を探っていく。第3章では修了研究作品において写真の活用方法を応用し自身の作品のテーマにあった作品制作を行い制作についてまとめた。